

映画史上二度と出現しない
最大・最後の衝撃ドキュメント！
ヨーロッパ全土を震えあがらせ
遂にそのベールを脱ぐ！

〈これが問題のショックシーンだ〉

一人の男が、家族の目の前で
数匹のライオンに食いころされる――
1975年2月18日撮影されたこの目をおおう
ばかりの惨事はすべて事実である

ULTIME GRIDA
DALLA SAVANA

地上最後の残酷 〈カラー作品〉長篇ドキュメント

グレートハンティング

監督・撮影 アントニオ・クリマーティ/マリオ・モッラ ■ナレーション台本/アルベルト・モラビア ■日本ヘラルド映画





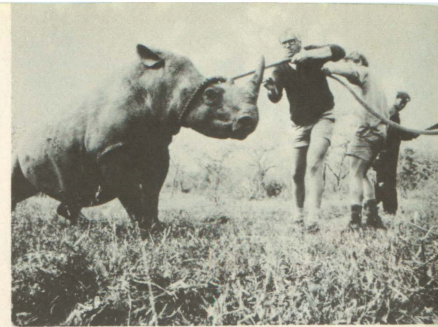
地上最後の残酷(カラー作品)長篇ドキュメント

グレートハンティング

日本ヘラルド映画

ULTIME GRIDA DALLA SAVANA

イタリア映画



■「スーパードキュメント」の登場
恐るべき映画が現われた。「グレート・ハン
ティング」という題名の通り、この衝撃的な
長篇ドキュメントのテーマは、動物対動物、
動物対人間、そして人間対人間の間に、いま
もくりかえされる「狩り」の生々しい実態で
ある。生存を賭けた喰うか喰われるかの死闘
もあれば、残酷な楽しみのための虐殺も描か
れる。

二人の若いドキュメンタリー作家アントニ
オ・クリマーティとマリオ・モツラは、アフ
リカ、アジア、ヨーロッパ、南北アメリカ、
オセアニア、南極、北極地帯にいたる全世界
を四年間にわたって長期ロケ、二〇万メート
ル(延百二十時間分)のフィルムを廻わして、
この超大作を完成させた。彼等の姿勢は、極
力「演出」や、興味本位の「事実再現」をさ
げ、事実の持つ衝撃で勝負している。この点
で「残酷ドキュメント」の元祖ヤコベッティや
その垂流と明確な一線を画している。何故、動物
と人間の間の共存と調和が不可能なのか、と
ヒューマンなアピールを一貫させているナレ
ーション台本は、アルベルト・モラビア。い
うまでもなく、「無関心な人々」、「軽蔑」など
の作品で知られるイタリアで最も高名な文学
者で、映画に対する深い関心を持つことでも
著名。

鮮烈なメッセージと「本物」の迫力、そし
て画面の持つたくい稀な美しさは、文句なし
に「ヤコベッティ」を超えるものとして、こ
の作品は今、イタリアで異常ともいえるセン
セーションなヒットを続けており、「ゴッド
ファーザー・パートII」の約二倍の興行収入
を記録している。(上映時間一時間三十分)

■生存の死闘——そしてニアミ族の肉喰い

生きるために他の動物を倒して喰う。密林
の掟であり、自然の残酷なルールである。オ
ランウータンを襲う豹。小猿を毎日数匹も吞
みこむ六メートルのアマゾン大蛇。そして、
狩りをして獲物を得るしか生きることの出来
ない未開の原住民もその掟なかにいる。槍や
ブーメランでコウモリを落とすオーストラリア
の原住民。こうした原住民の狩りに対する信仰
は、文明人の想像を越える。一九七五年一月
二十五日、中央アフリカのブルンジでニアミ
族の兄弟が、自然死した父親と親戚の死体の
頭をオノで叩き割り、その脳をすすり、肉を
喰うという事件があった。これは、ニアミ族
にあっては珍らしいことではなく、彼等の習
慣として死人から狩りの知識や技術を受けつ

ぐための儀式であり、国家の禁止令(死刑)
があっても決して絶滅することがない。

■大地と交わる原住民と文明の暴力

狩猟民族にとって、大地は神聖である。ク
ルー族の男たちは、毎年シーズンの初めに
大地に穴をあけ、揃って地球とフアックし、
それをはらませようとする。その壮大な光景
は、崇高ですらある。しかし、文明人にとつ
て、狩と遊戯にしかすぎない。ランブイエの
鹿狩、イギリスのキツネ狩り、アルゼンチン
のコンドルの生け捕り……。数多くの野獣が
意味もなく殺され、種族の絶滅にひんしてい
る動物も多い。これらに対して保護と育成の
考えが実を結びはじめたのは、ごく最近のこ
とである。

■空前のショック/目の前で人間がライオンに喰われる!

事件は、一九七五年二月十八日、アフリカ
のアングラにある自然動物保護区で起った。
観光客のピット・デーニッツは、写真を撮る
ために車から下り、ライオンにレンズを向け
ている時に背後に隠れていたもう一頭のライ
オンに不意を襲われ、またたく間に数頭のラ
イオンに喰い殺されてしまった。妻と、九才
の娘、二才の息子の目の前で起ったこの二分
間の惨事は、二人の現場にいあわせたツーリ
ストの16ミリカメラに完全に記録された。

■凄惨な野獣狩り・人間狩り

四秒に一挺製造されるライフルと一時間に
百六〇万発作られる弾丸によって、アフリカ
では毎年六千頭の象、百四〇万頭のシマウマ、
百六〇万頭の野牛が殺されている。獲物をと
る生活を文明によって破壊されたエスキモー
人は、意味もなく海鳥を打ち落して憂鬱を忘
れようとする。アンデスの農民たちは、ビ
ューマを殺し、そのピューマに復讐される。

しかし、より残酷な行為は、人間による人
間狩りだ。アマソンのインディオ、グアルナ
キ族が毒のついた吹矢で白人の入植者を殺す
というので、入植者達は無頼の私設軍隊を使
ってインディオを虐殺している。その数毎年
七五〇〇人。捕えたインディオの性器を切り
とり、頭の皮をはぎ、首を切る男たち。これ
は、戦争ではない。残忍な「狩り」なのだ。
人間の未来にとって、このような「狩り」
は必要なのであろうか。

野性の狼と対話するドイツのE・ツイーメ
ン博士の姿で終るこの作品のラストは、ある
願望と祈りがこめられている。

'76年 新春、衝撃の大ロードショー決定!

丸の内東宝 (211) 6088
丸の内東宝 (571) 1947
日劇地下
丸の内東宝
ニュー東宝
シネマ2
有楽町
日劇前

渋谷東宝 (461) 2288
道玄坂
渋谷東宝

新宿文化 (351) 3414
歌舞伎町
新宝
グランドオデオン座 (202) 0141

池袋駅東口
池袋劇場 (371) 8361
キンシ町
江東リッツ (631) 3121

相鉄ムービル (045) 311) 6226
相鉄映画 (045) 641) 8531
横浜地区
関内・馬車道
横浜東宝名画 (045) 641) 8531